

一 次の各問題に答えなさい。

問一 次の線部について①～⑤は漢字で書き⑥～⑩は読み方をひらがなで書きなさい。

- ① 大臣のジキヒツの手紙。
- ② 注文をウケタマワる。
- ③ カドデを祝う。
- ④ ケハイを消す。
- ⑤ 身をコにして働く。
- ⑥ 寺を建立する。
- ⑦ 怒りの形相になる。
- ⑧ 潔く罪を認める。
- ⑨ 常夏の島で暮らす。
- ⑩ 古道具を商う店。

問二 次のア～シの1～8に次の条件にあてはまる漢字一文字を書いて、四字熟語を完成させ、それぞれにふさわしい意味を後の1～12から選んで記号で答えなさい。

条件

- 1～6には同じ読み方の漢字が入ります
- 同じ番号には同じ漢字が入ります

語群

ア	1	死回生
イ	2	想天外
ウ	3	臨
エ	4	晩成
オ	5	消沈
カ	6	3
キ	7	7
	8	8

平成29年度

-1-

ク	7	刻千金
ケ	7	触即発
コ	7	心不乱
サ	7	刀両断
シ	3	7

意味

- 1 偉大な人物は遅れて頭角を現すということ
- 2 普通では全く思いもよらないこと
- 3 場合によって、その対応を変え、状況に応じた行動をとること
- 4 ひとつ間違えば、非常な危険に陥ろうとする瀬戸際
- 5 気力や元気が無くなって落ち込んでしまうこと
- 6 物事を思い切って処理するたとえ
- 7 一つの行為で、同時に二つの利益が得られること
- 8 一つの事に集中して、他の事に気をとられないこと
- 9 小さなきっかけで重大な事態が起こるかもしれない危険な状態に直面していること
- 10 わずかな時間が大切であることのとえ
- 11 あることをきっかけに気持ちを切り替えること
- 12 非常に悪い状態からよい状態に立ち戻らせること

-2-

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ぼくたちはもうくたくたになっていた。空しく野道に立っているよりほかに、どうすることもできなかった。

「こんな阿呆な」

こんな阿呆なことがあったまると舌打ちするように、アキラが言った。

「なめられてるのやで」

ぼくは野道にしゃがんでしまった。アキラは田のふちに生えているエノコログサを一本引き抜き、茎を噛みながら恨めしそうに葦原の方を見た。ぼくはしゃがんだままアキラにならない、月影の穂を引き抜き噛んだ。そして雑草の葉陰から広い野面を透かし眺めていた。

「また鳴きよるでよ」

アキラは冷やかな笑みを浮かべた。

①「もうこうなったらトコトンやろけ」

疲労と恐怖を突き抜け、妙な勇気が湧いてきた。

「トコトンやけどな……」

もとよりアキラはそのつもりだったらしい、が、

「何かもつとええ方法を考えんとあかんで」と、エノコログサを真横にくわえ直し、相変わらず葦原の方をじっと見つめている。

約束されたもののように鳴いた。

「どないなつとるんや」

アキラはエノコログサをぶいと飛ばし吹き出した。ぼくは立ちあがりながら笑い浮かれた。ぼくたちの浮かれるところを鎮めるように、また鳴く。

②「グロスヶホー」

③「コーン、コーン」

ぼくは野面の夜空を仰いだ。

「お月さんが笑ってござるでよ」

「そろそろほんまにだまされそうやな」

「もうこれはだまされてるのと、おんなじやで」

「実は、なあ」

アキラは太く低く声音を落とし、ぼくの方をうつろな眼差しで見つめながら、

「ほんまのことを言うとなあ、わしはアキラやないのやでエー」とからかう。からかうアキラの姿が、何となくキツネみたくに見えてきそうになったとき、

「あつ、ほやっ」と、アキラが急にアキラに戻った。

「何や」

「ええこと思いついたで」

「また行くのけ」

「ちがうがな、一人だけ向こうへ行くのよ」

ぼくはアキラの言うことをすぐ了解した。うんとアキラがうなずく。

「はさみ討ちみたいなんやな」

ぼくが言った。

「おかしなはさみ討ちやけんどな」

アキラは笑い、しかしすぐに、

「ほんならわしが行くでな。ここで待っててくれよ」と慎重になる。

「分かった」

独りになることの心細さみたいなものをすこし感じたが、いさぎよくぼくは同意する。なぜこんな単純なことを思いつかなかったのだろうか。葦原へとまっすぐ延びる畦道のところでアキラは立ちどまり、

「ちよつと待てよ」となおも慎重だ。そして、

「もう一回鳴きよるまで待とう。向こうにいよるのを確かめてからや」と言う。ぼくたちは身もこころも夜の野面に溶け込むように鎮め、待った。待っているのを知っているかのように鳴いた。

「コーン、コーン」

澄んだ鳴き声は広い野面の空間に⑥。

「グロスヶホー」

⑦「われた含みのある深い鳴き声は、月夜の野面に闇を吐く。」

「行くでエ」

アキラはうなずき、笑みで合図した。

「だまされんときよ」

アキラはそう言う、丸木橋を渡る要領で、トン、トンと足を送る。五、六歩も進んだときだった。

「あーっ」とアキラが押し殺したように叫んだ。と、彼の影はぐらつとよるめき右側の田んぼの方へ傾き、そのまま細い畦道を腹に抱えるような形で、バサッと倒れてしまったのだ。

「おい、アキちゃん」

身の軽い彼ともあるうものが……。ぼくは急ぎ、トトト、と足を送った。アキラは腹這いの恰好で稲田から頭だけを出し、もがいている。

「手がなかなか抜けないやが……」

泥田に両手を深々と突っ込んでしまったらしい。

「何をしてるんや」

アキラのぶざまな恰好を笑った。手を貸そうにも足場が悪い。

「だ、だまされたんや」

アキラはようやく右手を抜き、自分の不覚を打ち消すように苦笑いを浮かべながら言った。抜いた右手にぼくの手を貸そうとしたときだ。

「コーン、コーン」

鼓膜がふるえた。

何という澄んだきれいな声か。月の光を飲み、飲んだ光を青白く夜空に返しているキツネの姿が目に見えた。

そのとき、葦原の黒い影がすーっと音もなく迫ってきた。そして月の光をさえぎり、ぼくの体を頭からすっぽり包んだ。

くらーっと目まいがした。足元の大地が大きく揺れたのと同時に、ぼくは両手をぐるぐるとまわしながら、体ごと悲鳴をあげていた。何とか平衡を保とうとしたが、逆に勢いよくバサッと仰向けさま、稲田に倒れてしまった。

最初にお尻、そして腰、背中と、水の冷たさが伝わってくる。空には蒼白なお月さま。

「ゴロスケホー」

もはやいかんともしがたいこのありさまに、ぼくは腹の底から⑩。畦道をはさんでアキラは向こう側。

「何してるんや」と身を起こそうと踏んばっているらしい。そして、

「笑えて力はいらへんがな」

アキラは体を支え切れず、またも四つん這いになったらしい。ぼくは稲株の弾力をうまく利用してゴロリと半転し、泥田に両手を奪われぬように一株一株に手を置き、畦道にかりうじて残った足を中心に、時計の針のように体を巡らせやうと身を起こした。アキラもふたたび右手を抜いたのか、ぼくの方へ突き出し、

「おい、たのむ……」

くくつ、くくつ、と、苦しうに笑いをこらえている不恰好なその姿に、畦道に尻餅をついたままのぼくも、ふたたび大笑いする。アキラの右手にこびりついた泥土が月光に照らされ、油を塗ったように見える。

「完全にだまされたんや」

やうと体勢を立て直したアキラが、みずから納得するように言う。

「だまされてる」

ぼくは笑いをこらえ、神妙に、そしてすこし厳かな気持ちをこめて言った。

「帰ろ」

アキラが言った。とつぜんの弱音に、

「帰るのけ？」と、ぼくは背中の中生ぬるい感触と泥の匂いに気を取り直そうとする。

「あかん、もう帰ろ。何せわしらはだまされてるんやさかい」

アキラは笑みを含み、首を振り、戻るように合図した。ぼくは仕方なく、そして⑪。幾分ほっとした気持ちで応じた。畦道を戻りながら、

「アキちゃん、どないになったんや、すべったんか」

「ちがう。途中で畦道がすーっと消えて見えんようになってしまった」と真面目に言う。そしてアキラはぼくに同じように尋いた。

「葦原が動いたんや。ほんで目の前がまっ暗になつてしもた」

「やっぱりだまされたんやな」

「だまされたんや」

ぼくたちは、このまぎれもない科学的事実をしっかりと確認し合うように呟いた。

野道に出た。と、アキラは、

「早う帰る。ほやないとまただまされるぞ」と言うが早いか、とつぜん駆け出した。

「だまされる。だまされる。」

ぼくは呪文を唱えるように口走りながら、アキラのあとを追う。ぼくたちは息せき切って走った。川に落ち込む溝を飛び越え、柳の下枝をくぐり、口々に「だまされた」「だまされる」と、うわ言のように言いながら走った。すると、キツネがビタリとぼくの背中にくっついてくるような気がしてくる。背中が冷たい。

「おい、アキラちゃん、早う、早う行ってくれ」

「ほんなこと言うても・・・」

アキラの払う柳の枝がぼくの顔をしばく。

「キツネに憑かれそうや。ひえーっ」

背中が冷やかで寒いのだ。音もなく見えないキツネがついて来ている。そう思い込むと、前を走るアキラを飛び越してでも逃げたくなる。

ようやく川が大きく蛇行しているところの広い道に出た。アキラが川べりの草むらにへたり込んだ。転がるようにぼくも続いた。しばらくのあいだ互いの息を聴いていた。自然に笑みがこぼれてくる。

「ふふっ」

「へへっ」

「だまされたね」

「うん、だまされた」

ぼくたちは是非でもだまされたことしておかねばならない。でなければ、科学的にどうしても説明がつかないのだ。

「コーン、コーン」

遠くになった葦原で鳴いている。すぐ傍で聞くよりやわらかな鳴き声だ。フクロウも鳴いた。

「まだ鳴いとるでよ」

アキラが半身を起こしながら呆れたように言う。

「ええ声やなあ」

-7-

草むらに背中をあたまながらぼくはふと呟いた。

いつまでもこの月夜の野面に遊んでいたかった。

(川島民親『ぼくの動物記 第二話 野面 キツネとフクロウ』より)

※ 呟れた声がかすれた。

問一

——線①「もうこうなったらトコトンやろけ」にはどういう態度が表れていますか。ふさわしいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 目の前の不都合な現実から目をそらし、気楽に過ごそうとする無責任な態度

イ 自分に与えられた使命を最後までやり遂げようとする生真面目な態度
ウ 自分が経験している事実の原因を突き止めようとする科学的な態度
エ 疲労を感じながらも、目の前の困難に立ち向かっていこうとする勇敢な態度

オ 自分たちがだまされないようにしようとする慎重な態度

問二

——線②「ゴロスケホー」③「コーン、コーン」はそれぞれ何の鳴き声ですか。本文中の語で答えなさい。

問三

——線④「アキラに戻った」とはどういうことですか、説明しなさい。

問四

——線⑤「こんな単純なこと」とは何を指しますか。

問五

空らん ⑥ ⑩ に入る言葉としてふさわしいものを次からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

⑥ ア 重くのしかかる

イ じわりとしみこむ

ウ 不安をまきちらす

エ 心地良いうるおいをあたえる

オ 気高く響きわたる

-8-

⑩

- ア 泣いた
- イ 笑った
- ウ 落ち込んだ
- エ 怒った
- オ 嘆いた

問六 — 線⑦「トン、トンと足を送る」はどのような様子表現していますか。ふさわしいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 軽快
- イ 歓喜
- ウ 恐怖
- エ 不安
- オ あせり

問七 — 線⑧「コーン、コーン」という声の説明としてふさわしいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ぼくたちをさらに不愉快にする声
- イ ぼくたちの不安をいっそうつのらせる声
- ウ ぼくたちを幻想的な世界へと誘う美しい声
- エ ぼくたちに挑戦してくるような勇ましい声
- オ ぼくたちを恐怖のどん底に突き落とす不気味な声

問八 — 線⑨「いかんともしがたい」⑩「蛇行している」の意味をそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ⑨
- ア いかんともしがたい
- イ なんとかしたい
- ウ いかにものにもかえられない
- エ ながんだかわからない
- オ いこうとしてもいけない
- オ なんともしようがない

⑩ 蛇行している

- ア 曲がっている
- イ 開けている
- ウ 下っている
- エ 荒れている
- オ 飛び出ている

平成29年度

-9-

問九 — 線⑪「幾分ほっとした気持」になったのはなぜですか。ふさわしいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア これ以上この場の恐怖に耐えられそうもないから
- イ これ以上アキラにつきあわなくて済むから
- ウ これ以上だまされずに済むから
- エ これ以上アキラをだまさなくて済むから
- オ 葦原や稲田にいるのにはもうウンザリしているから

問十 — 線⑫「このまぎれもない科学的事実」と表現しているのはなぜですか。ふさわしいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「消えて見えんようになる」「目の前がまっ暗になる」ということは、どちらも医学的なことがらだから
- イ 「畦道がすーっと消える」「葦原が動く」ということは、科学的にあつてはならないことだから
- ウ 「畦道がすーっと消える」「葦原が動く」ということは、どちらも空想科学的なことがらだから
- エ 「畦道がすーっと消える」「葦原が動く」ということは、理解不能だけれど、実際におこったことだから
- オ 「葦原が動いた」「目の前がまっ暗になった」という事実を、ぼくたちがしっかりと確認し合うように呟いたから

問十一 この文章のように「だまされた」としたら、あなたならどのような気持ちになるでしょうか。その理由とともに書きなさい。

-10-

解答用紙 (国語)

A日程 2月1日午前実施

受験番号
氏名
得点
/100

問二		問一		
ア	1	⑥ 建立	① ジキヒツ	
イ	2			
ウ	3			
エ	4	⑦ 形相	② ウケタマワ	る
オ	5			
カ	6			
キ	7	⑧ 潔	③ カドデ	く
ク	8			
ケ				
コ		⑨ 常夏	④ ケハイ	
サ				
シ				
		⑩ 商	⑤ コ	う

二										
問十二	問十	問九	問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一
			⑨			⑥			②	
			⑬			⑩				
									③	

UENO GAKUEN

平成29年度